

「宇宙のいのち」考・・・星々への想い

On the Life of the Universe, being Astronomically Minded

村松 眞一

MURAMATSU Shin-ichi

Abstract: “The Life of the Universe” as spoken by the grave-guard in the Japanese version of *Noh Hamlet* has brought me some astronomical and bio-historical associations with my life’s seed of the fire: the Planet Pluto, — cosmic energy, — the primitive worship of the Sun, — the origin of bacteria, especially mitochondria, etc. These poetical networks of scientific knowledge seem to give us a lesson that we human creatures on the Earth should by any means join one another and coexist, hoping to connect our little lives to the Life of the Universe as a whole.

Keywords: the Life of the Universe, life’s seed of the fire, the Planet Pluto, cosmic energy, the worship of the Sun, bacteria esp. mitochondria, coexistence.

「宇宙のいのち」、いのちの火種、冥王星、宇宙エネルギー、太陽崇拝、原始細胞、ミトコンドリア、共生。

冥王星のこと

昨年、冥王星が太陽系の惑星から外されたというニュースが新聞等で話題になったことがあった。ただ天文学上のトピックになっただけではなく、まったくの素人が、その話題に、ある感想や感慨をもったのであった。

なぜ、それが話題になったのであろうか。太陽系で一番遠いそんな星が、たかが一つや二つ、惑星であろうがなかろうが、日常生活になんら差し障りはないではないか。そう思ったひとも多いかもしれぬ。

しかし、まったくの素人ではあっても、日頃天体に関心をもっている私は、まずそ

のことに淋しさを禁じえなかった。太陽系の構成メンバーが一つ減った、という淋しさである。天王星 (Uranus)、海王星 (Neptune) と並んで、せっかく冥王星 (Pluto) という良い名前がついていたのに、という思いもあった。冥王星は太陽系の一番外側にある惑星とされていたが、似たような大きさの星がその先に発見され、また冥王星そのものも意外に小さく (直径 2,280km)、その軌道面は、他の惑星の楕円軌道面に対して傾いていることも分かってきたという。地球からの平均距離は約 43 億キロメートル。そんな遠くにある惑星、しかもわが月よりも小さいと言われる星が、一つくらいなくても、大したことはない、とも思われる。にも拘らずやっぱり私は淋しい。冥王星そのものが変わったわけでもなく、その名前まで消えてしまうわけでもなからうのに、9 個あった太陽系のメンバーでなくなり、8 個になってしまうのが淋しいのである。それは単に情緒的なものであろう。しかし、それはそれで多少言い訳がある。

年をとって、私は自分の命のほとぼり、つまり個体としてもっている私のエネルギーが乏しくなってくるにつれて、「いのち」とは何か、という問題を一層身近に考えざるをえなくなった。この命のほとぼり (熱) はどこから来ているのか、その源は何か、と。

その答えは、広大無辺の宇宙に漲っているエネルギー、宇宙エネルギーであろう。端的に、そして具体的に、身近かなところから言えば、太陽を中心とする星の一族、つまり太陽系である。その太陽系のメンバーの一つがなくなったのだ。これは淋しい。惑星の定義 (条件) が更めて規定され、冥王星はその条件を満たさないので、惑星とは呼べなくなったということだが、太陽を回る惑星が一つ減り、小惑星 (否、矮惑星とか言うそうである) に転落したのだから、やはり淋しさは禁じえないのである。

太陽崇拜と星々

さて、星はすべてエネルギーであると私は思う。宇宙エネルギーと言うと抽象的であるが、実は、星は宇宙エネルギーが形をなしたものである。星は宇宙エネルギーの塊であり、象徴でもある。太陽系も、太陽を含む多数の恒星からなる我々の銀河系も、銀河系外星雲も、すべてエネルギーであり、このエネルギーから、(環境・条件が調べば) 有機的な生命が^{いのち}発生する。我々一人一人の命も星に由来し、星からそのエネルギーを頂いていると言えるだろう。さしあたり太陽系の中で考えれば、その中心である太陽は最大のエネルギー源であり、その周りを回っている惑星も、惑星が連れている衛星もエネルギーである。

ところで、その太陽であるが、もしも太陽が消滅すれば、地球上の生物は生きていけなくなるだろう。植物はみな生育をはばまれる。植物に依存する動物は生きられないし、その動物に依存する動物もまた生きられない。連鎖的に生きとし生けるものはみんな生きられない。こんなことは、古代の人たちは直観的によく分かっていた。そこから太陽崇拝が自然に起こったかと思われる。

今は失われた原始宗教や神話として伝えられる伝説の中にも、太陽神を崇めるものは多いであろう。初期のピラミッドを建てた古代エジプトで、重要な神は太陽神と洪水の神であったと言われるし、メソポタミアにもシャマシュ（Shamash）と呼ばれる太陽神への賛歌があったことが知られている。ギリシャ神話のアポロンが日の神であることもよく知られ、否、どこよりも、わが日本神話の天照大神は日の女神である。（この女神が天の岩戸にお隠れになった話をいまの小学生は知っているだろうか。）

現今の宗教においても、多神教のなかに太陽神がある。仏教では、五如来の筆頭にあるのが大日如来である。ヒンズー教にも太陽神スーリヤがある。一神教であるキリスト教の神も、私が牧師から伺ったところによれば、チャペルを東向きに、つまり祭壇がお堂の中で東に位置するように設けられ（orientate）、太陽崇拝と関係しているとのことであった。なるほど注意してみるとそのとおりに違いない。良く知られたトマス・ハーディーの「妻ゆえに」という短編を読んだ方は、覚えておられようが、その冒頭に教会堂の描写があり、西日がお堂の出口に出てきた船乗りの顔を照らす。祭壇はお堂の中、東に位置していたことが分かる。

ラフカディオ・ハーンが来日してまもなく、松江で気がついたのは、早朝、宍道湖に舟を浮かべた漁師が、柏手を打って昇る朝日を拝んでいる風景であった。私自身も、戦後まもなくのことであったが、浜松のわが家で、向かいのおやぢさんが、朝、庭へ出て柏手を打って日の神様を拝んでいたのを思い出す。そのような光景は、今日はもう見られなくなったであろうが、それでもなお、御来光を拝みに富士山頂に登る人々や、毎年、遠州灘の中田島海岸で初日の出を拝んで新年を迎える人たちがいることもまた事実である。

太陽ばかりではない。西洋文学にふれたことがあれば、中世・近世には星が人間に与える影響ということが真剣に考えられたことがわかる。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の前口上にもあるとおり、このお芝居のヒーローとヒロインは「星回りのわるい恋人たち」（star-crossed lovers）であった。英語に influence（影響）という言葉があるが、元来この語の意味するものは、星が人間の心に与える影響力である。イン+フルエンスと分解できて、流入、流れ入る、つまり星から発する流れが人間の体に入ってきて、人間の性格・運勢を左右すると信じられたことによる。占星

術の起源もそこにある。いまでは、それをまともに信じる人はおそらくいないであろうが、それでも我々の祖先が干支を云々したように、単なる興味から自分の星座のことを言う若者たちも少なくない。

「宇宙のいのち」

話を元にもどすが、私は自分のいのちのほとぼりが乏しくなり、冬の日が出が気になって、「冬至すぎ日ごと日の目のまちどおき」などというへボ句を作ってみたことがあった。太陽を初めとして、星から「いのち」をもらっていると思うからである。それにつけても、優れた詩人は、若い時から既に、老いの命のほとぼりに目を付けるものだ、と、いたく感心する。アイルランドの詩人 W. B. イェイツに「老母のうた」という詩があった。短い作だから紹介してみると、

わたしゃ朝 明け方にもう起き出して
真っ赤になるまで 火だね吹く
それからあとは 洗濯パン焼き拭き掃除
いつの間にやら 夕空に星がまたたく
若いもんは まだ眠りこけて床のなか
ゆめ見るのは 飾りリボンの取り合せ
為すすべもなく その日を過ごしては
風が捲毛をあげただけで 溜め息をつく
その間もわたしゃ働くのよ 老いの身で
火だね小さく 消えゆくゆえに

こうして星と命のほとぼりを、とりとめもなく書き綴ってみると、天体への思いというものは、一種の悟りのような心境に私を導いてくれる。この地上の争いや戦争が、いかに馬鹿げたものであるか。にも拘らず大昔から人間は性懲りもなく、闘争や戦争を続け、その一方で、^{ほこ}矛をおさめ、平和を求める努力もしてきたのだと。そもそも対立・抗争および和解・融合ということは、命あるものの宿命的な営みではないのか。太陽系のなかに地球ができて、ほぼ 40 億年前とされる原始の海の中の、バクテリアの進化を見てみると、そんなことも考えられる。

現代の生物進化の研究によれば、生物は対立抗争だけ続けていては生きられず、生

き残るためには、必ず相手と共生、共存しながら進化してきたものだという。このことは、細胞の段階ではっきりと認められるようである。原始の地球上で、異なるバクテリアの対立抗争がやがて共生の道を見だし、真核細胞と呼ばれる進化の原点となる細胞を作った。あらゆる動植物の細胞は、私たち人体の細胞を含めて、中に核とミトコンドリアをもっているが、これが進化の原理である共生の姿を今も留めているというのである。このミトコンドリアの祖先は、もと固い殻をもったバクテリアで、それが柔らかい膜をもったバクテリアと抗争し、相手を食い破って侵入したが、相手と共生しなければ自分も生きていけなくなって、結局一つの細胞のなかにミトコンドリアも共存するという姿をとどめることになったという。

私はこのことを知って、非常に興味ふかく思った。つまり生物進化の原理によって、人間がこの地球上で生き残るための重要な原理、一つのモラルが示されているように見えるからである。そして生物学が科学の領域を越えて、思想・哲学の領域まで広がるようになった観があるからである。

そこで私は思う、何という愚かなことか、核爆弾などという馬鹿げた兵器を作ったこと、またそれを既に保有し、抑止力と称して、愚かにも新たにそれを作ろうとするものを押さえつける、双方あたかもヤクザみたいな外交が。

対立・抗争は、いい加減にここで止めて、和解・共生へと舵とりをしないと、人間は自滅への道をたどることになりはしないか。

「永遠の生命」という言葉がある。この言葉が生まれた根拠には、生命が「永遠」を志向しているという心象イメージがあるに違いない。生命——生きたいという生の欲求——が目指すものは「永遠」である。しかし、我々個人の命には限りがあることも自明である。ならば我々は、生死を超えたしょうじ（止揚した）「宇宙のいのち」を想うべきであろう。我々の祖先を偲び、また子孫を思えば、この真のいのちの在りかたを目指すべきであろう。

「無明おろかさもなく、無明おろかさのなくなることもない… 老いも死もなく、老いと死のなくなることもない…」この一見難解で不可思議な（弁証法的話法による）『般若心経』の言葉は、我々が目指すべき、「本当のいのち」のことではないのか。そして本当のいのちとは生死を超えた「宇宙のいのち」から来ているのではないか。

最晩年、漱石が揮毫した「則天去私」という言葉はよく知られている。これを

この世もあの世も本当のいのち／宇宙のいのちにつながること

と言い換えられた日本語能『ハムレット』台本作者・上田邦義氏に私は感嘆した（氏

の独創的な間狂言で墓守りが語る)。これは彼岸と此岸はセットになっていて(同じいのちの両面)、彼岸への思いによって此岸の尊さを新たにしたいという、私の『般若心経』の読み方と一致するように思われたのである。